

令和2年度 第2回インクルーシブ教育（支援児包括教育）推進委員会 議事録

□開催日時：令和2年12月4日（金）14時～16時

□開催場所：駅北庁舎4階 第3会議室

□出席者（敬称略）

- ・委員：宇野宏幸 中野正大 柴田勇夫 安藤克己 水野浩庫 高尾和督
岡英樹 渡邊早百合 深萱健次 保母朋子 長谷川邦代 加藤裕子
瀬瀬育恵 天野智恵子
- ・事務局：渡辺教育長 河本副教育長 高橋次長 松浦一信
小島章予 長谷川京子 横田真己 石田光恵 後藤正樹

1 あいさつ

教育長あいさつ

2 報告・検討内容

（1）検討事項について

- ・基本施策2 連続性のある「多様で柔軟な学びの場」の整備
中学校における通級指導教室について

事務局

中学校通級指導教室設置に向けて、保護者の意向を調査したり、他市の状況を調べたりする中で、中学校通級で身に付けたい力を明確にし、本人や保護者、教職員に周知する必要があると考えています。今日の委員会では、委員の皆さんが考える「身に付けたい力」を教えてください。

委員

（事例の紹介として、自閉症スペクトラム、学習障害のある児童が、学習を行う上での困り感や合理的配慮を希望していることが記された手紙を紹介）

委員

中学校を卒業すると、社会に出ることを考えると、困ったときや分からないことがあったときにSOSを出す力を身に付けてほしいと思っています。職場で同僚と仲良く仕事をしていかななくてはならないことを考えると、話を合わせたり、人の話を聞いたり、わからないときには問い返したりすることができるコミュニケーション力を身に付けてほしいと思います。また、時間を意識するために、時計を読んだり、時間を計算したりする力も身に付けることができるとよいと思います。

委員

「みんなと同じにしないでほしい」「みんなが見ているから…」といったように、中学1年生を見ていると、「何とかみんなと同じようにしたい」とまじめに取り組むも

のの、疲れてしまう傾向があります。生徒に尋ねると、家で寝ていなかったり、生活のリズムが作れていなかったりするので、自己を管理する力も身に付けてほしいと思います。

委員

自分自身を知ることと自分の周囲の人を理解することが必要だと考えます。また、自分はこうすればできるといった可能性を求める気持ちも大切にしてほしいです。通級を通じて、自信をつけ、未来を切り開いていく気持ちを持つことができるようになってほしいです。

委員

自分に自信がないためか、こうした方がいいと分かっているにもかかわらず、行動に移せないことが多いように思います。また、自分の苦手さを上手に受け入れて、前向きに考えられる力も付けてほしいです。また、通級が、保護者の不安を取り除くような場所になってほしいと考えています。

委員

子どもたちの中には、自分が支援を受けていることを知らない子もいると思います。そのため、自分が受けている「支援」の意味を考えてほしいと思います。そして、自分のことを理解し、どういった支援が自分には有効であるかを考え、通級に通う意味を考えてほしいと思います。また、中学校通級のゴールを見据えておく必要があると思います。

委員

自分の特性を理解できるようになることが大切だと思います。苦手なことを困ったことを他者に伝えられ力を身に付けてほしいと思います。

委員

困り感を伝えられること、前向きに物事をとらえることが大切だと考えます。本人がこういった力を付けることだけでなく、周囲の人たちが、その子の力を発揮できるように環境を整え、その子の思いを受け止めることが大切だと考えます。また、小さい時から困ったことを伝えたときに、受け止めてくれる人がいるという安心感を感じてほしいと思います。

委員

中学校の通級に通うことにポジティブなイメージが持てるといいと思います。自分の弱さと向き合い、よりよくありたいと願っている自分に、自信や誇りを感じてほしいと願っています。また、自己肯定感が高まったり、不安な気持ちが安心する気持ちになったりできるといいなと考えます。また、本人だけでなく、周囲の人たちも通級に通うことがポジティブにとらえられるようになってほしいと願っています。

委員

以前、「何が分かりますか」「何が分かりませんか」「一番したいことは何ですか」と聞かれたときに、答えることができなかったことがあります。でも、できるようになりたいという気持ちはあり、こういうことは、子どもたちも同じだと思いました。子どもたちが頑張れない自分のイライラする気持ちも、とてもよく分かります。話を聞いてもらうだけでも、心が落ち着くと思うので、イライラを軽減できる力を付けてほしいと思っています。こういう力は社会に出たときにも役立つと思います。また、少しでもできるようになると、子どもたちは輝くので、通級がどんどん褒めてもらう場であると、毎日が楽しいし、頑張れると思います。

委員

社会に出るということを考えると、コミュニケーション力を身に付けてほしいと思います。施設の職員と話ができるが、障がい者同士のコミュニケーションが苦手な人もいます。高等部になってくると、さらに高度なスキルが必要になってきますが、中学生の段階では、障がい者同士でのコミュニケーションが取れる、仲良くなれるといった力を身に付けてほしいと思います。また、先ほど話題になった合理的配慮も大切なことだと思います。そして、障がいに対して、あるがまま受け入れる、その子にあった支援として何ができるかを考えていきたいと思っています。

委員

通級というと、勉強をどう進めていくかということが最初に思い浮かびましたが、皆さんの話し合いを聞いていると、勉強とは違う面で力を付けてほしいということが分かりました。しかし、保護者の中には、勉強が遅れるという不安をもっている方もいると思います。自分の強みや自分はこういうところが上手いかないな、といった自分を知る機会を通級で与えてもらい、自分はこうやったら取り組むことができるといった具体的な方策がわかると、やる気が出て、将来に希望が持てると思います。

委員

友達を作る力を身に付けてほしいと思います。そのためにはソーシャルスキル、コミュニケーション、暗黙の社会のルールを知ることが大切だと思います。また、得意なもの、やりたいものを見つけることも大切だと思います。さらに、社会で生きていくための最小限の学力をつけてあげる必要性も感じています。

委員

自分を知ることは、大切なことだと思います。中学生は思春期であり、大人になっていく過程の中で、自分は何者であろうかと思う時期で、「他の子と何か違うのだろうか」と思い始めるのが、小学校高学年から中学生にかけてです。自分が他者と違うところがあるということをうまく受け入れることが重要だと思います。今日は、「身に付けてほしいこと」ということで意見交流をしています。これは先生サイドから身に付けてほ

しい力になります。通級の良さは、個別で指導ができる場、子どもに合わせた指導ができる場であるため、子どものニーズをとらえることが大切だと思います。

(2) 報告事項

- ・基本施策3 教職員の専門性の向上を図る研修の充実
特別支援教育コーディネーター研修会の研修について（幼保小中の連携）
- ・基本施策4 就学先決定の仕組みと教育支援の充実
専門家チームによる巡回相談、就学先決定の仕組みの充実
早期からの教育相談・支援の充実
- ・基本施策5 「一貫した支援の取り組み」について
園と学校間の連携、および卒業後の諸機関との連携

(3) 講話

- ・兵庫教育大学 宇野先生による「最近の特別支援教育の動向」について

10月に日本LD学会をオンラインで開催しました。その中のシンポジウムで陶都中学校での文部科学省の委託事業であった「特別支援教育を学校経営に位置付ける」研究事業の成果を紹介していただきました。「学びをめぐる多様性と授業・学校づくり」という本の中では、陶都中の研究事業のことだけでなく、学びの多様性についても取り上げています。発達障がいの子どもたちは、学び方の多様性を持っています。例えば、漢字の覚え方もそのまま覚えるのではなく、意味づけをしたり、ストーリーを持たせたりすることで習得しやすくなります。

発行した本の中では、日本でのインクルーシブ教育を考えていくことを話題にしました。欧米と同じインクルーシブ教育をそのまま取り入れることは、馴染みにくいこともあります。一方で、日本の学校は、みんな一緒に、協力して仲良くしていきましようという思いで取り組んできており、外国に比べても、共に学ぶという素地はありました。日本と外国のインクルーシブ教育を紹介する中で、日本の将来像を考えていきましようという思いで、通常学級の授業づくり、いわゆるユニバーサルデザインの授業づくりや学校経営の在り方が書かれています。

次に、合理的配慮に関わってです。「合理的配慮」という言葉は、行政用語で、言い換えれば、ニーズのある子どもたちに対する「個別の配慮」と言うことができます。大切にしたいことは「公正性」ということです。今までは平等と言われてきました。例えば「タブレット端末を、生徒全員に提供する」といったことは、平等性を重視したこととなります。今後は「公正性」を担保する方向に進んでいきます。公正性も時代とともに変わり、障害があるということが、社会参加への障壁になってはいけないという考えが、「公正性を保つ」ということとなります。

発達障がいの子どもたちは、生まれた時から障がいがあり、なかなか見えにくく、理

解されづらい障がいです。教科書の文字が読めないという子どもたちは、タブレット端末の読み上げ機能を使ってよいという支援をすることで、次の学習に向かえるようになります。学校教育で大切なことは、学びのねらいです。（タブレット端末が）読み上げるとは、話や文章の内容を理解する手段となります。子どもたちに何を学ばせるのかを先生たちがよく分かっている必要があります。また、合理的配慮と評価を一体にして考えないといけません。

学校では、GIGA スクール構想ということが出てきました。今後は、一人一台端末を所持することになります。その背景にあるものは、ソサイエティ 5.0 です。ソサイエティ 1.0 は狩猟社会、2.0 は農耕社会、3.0 は工業化社会、4.0 は情報社会、5.0 は人間中心で AI を活用して社会問題が解決できるような社会です。これまで合理的配慮の一つとしてタブレット端末の利用がありましたが、ICT の利用が特別なことではなくなる時代になってきたと言うことができます。学校での学習は、「個別最適化」になります。すべての子どもたちに、ICT を活用して、それぞれの子どもたちにとって、学習を最適化するようにできるということです。つまり、子どもに合わせた進度や内容をオンライン学習や ICT で提供できるし、学習の記録もできます。こういったことが、個別の指導計画と、どのように結びついていくのかといったことにつながっていくと思われまふ。ここで大切なことは、発達障がいの子も子どもたちも含めて、誰一人学習で取り残さないということに留意しながら個別最適化を進めることになります。例えば、発達障がいの子もの中で、宿題に関わる悩み、宿題を持ってこない、提出しないといった悩みを抱えている子がいます。宿題の必要もなくなるかもしれないということになるかもしれませんし、習得した漢字の宿題は出さないということになるかもしれません。未習得の子には、こういう宿題をしましよとといった時代になってくるかもしれません。特別支援の分野では、発達障がいの子もや学習障がいの子もには、どういふ宿題を出す方がいいのか、といった話になると思われまふ。陶都中学校の取り組みの中で、グループ学習の中で共同的な学びを進めてきました。個別最適化の中で言われている一人一人が独自の視点で情報を収集して、学習のねらいに合わせて、取捨選択し、編集加工をしましよ。そして、その情報をグループやクラスで共有し、記録して学ぶことを行いましよ。

次の大きな方向としては、一人一人の子もが、自立的に学ぶことができる方向に向かっています。ここで話題にしたいのは、「学びのユニバーサルデザイン化（UDL）」です。日本のユニバーサルデザインの授業は、教科の授業の在り方を話題にしているが、学びのユニバーサルデザインは、子どもが主役で、自立的に学習をすることができる子どもを育成することを目指しましよ。漢字の覚え方を例にしてみると、視覚的に部品を足し算して覚える方法、聴覚的に語呂合わせで覚えていく方法、エピソード的に話を作つて覚える方法といったように、漢字を書く方法を自分で選んで、学習を進めてしましよという実践を行つた先生がみえましよ。

最後に、今後の日本のインクルーシブ教育を考えたときに、ドイツ発祥でオランダで普及しているイエナプランが参考になるのではないかと考えていましよ。日本で初めてイ

エナプラン教育を取り入れた学校が長野県大日方小学校です。広島県の福山市も公立学校で取り入れる準備をしており、今後、日本でも増えていくことが予想されます。イエナプランの特徴の一つは異学年交流で、1年生から3年生までが同じ教室で学んでいます。一斉授業ではなく、それぞれの子どもが、自分のペースで勉強をしていることが特徴です。高学年になると、自分の時間割を自分で決めることとなります。イエナプランでは、対話を重視していることや、自分自身のことを話す時間があったり、思考力を育成する授業があったり、「本物の経験」を積んだりすることを重視しています。さらに、イエナプランの中では、ブロックアワーという時間があり、いわゆる教科の学習に相当をする。子ども自身が、こういったことを勉強したいという思いを自分で選択し、計画できるようになることも目指しています。インクルーシブ教育の中で、こういった学校の姿を目指していくのかを議論し、検討していくことが大切です。

委員

新たな学び方を模索していくことを、本腰を入れてやっていかなくてはいけないことを学びました。

3 次回の予定

3月を予定

4 あいさつ